

寂しき魚

室生犀星

青空文庫

それは古い沼で、川尻かわじりからつづいて蒼あおくどんよりとしていた上に、葦あしやよしがところどころに暗いまでに繁しげっていました。沼の水はときどき静かな波を風のまにまに湛たえるほかは、しんとして、きみのわるいほど静まりきっていました。ただ、おりおり、岸の葦のしげみに川蝦かわえびが、その長い髭ひげを水の上まで出して跳はねるばかりでした。

その沼はいつごろからあつたものか誰も知らない。涸かれたこともなければ、減へつたこともなく、ゆらゆらした水がいつも沼一杯にみなぎっていた。そのうえには、どんよりした鉛筆でぼかしたような曇くもつた日ざしが、晚おそい秋頃らしく、重く、低い雲脚くもあしを垂た

れていたのです。

そこには非常に古い一匹の魚が住んでいて、岸の方の葦のくらやみに、ぼんやりと浮きあがっていました。かれは水中の王者のように、その大きなからだを水面とすれすれにさせながら、いつも動かず震えもしないで、しずかに、ゆつくりと浮きあがっていたのです。その魚の藍あゐばんだ鱗うろこには、のめのめな水苔みずごけが生えていて、どれだけ古く生きていたかが解わかるのです。ただに鱗ばかりではなく、尾やひれまでに微塵みじんな、水垢みずあかのようなこまかい藻ものようなものが生え、それが顫ふるえるということもなく、かれのからだ一面に震えていました。

その魚はいつも何かしきりに考えているような、澄んだおとなしい泳ぎ方をしていた。たとえば、やや衰えはじめた青い目のひかりはいつの間にか薄らいで、ほとんど動くというようなことがなかった。いつも森のなかのように静かで、たえず空の方をながめては、また何か考えあぐんだように、間もなく沼の底ふかく眺め込むのでした。沼の底は、これもどんより曇つて、幾枚もの硝子板を合したように、ある蔭はちぢみ、あるものは細長くなつて見えしました。竹や水や古い蓆の破れたのなどが、いちめんに濃い陰影をつくつて、そこにも鯉や鮒や鯰のようなものまで、一つずつの魚巢に潜りこんで、れいの青い目でそとを眺めていました。けれども、かれらは、ひるのうちは滅多に水の上まで、空気のある

るところまでは浮きあがってゆかなかつた。そうするには、昼間はあまりに恐ろしいような気がしたからです。そのかわり夜になると、かれらは珍らしい水と空気との境さかいめ目まで行って、月や星や風や空気や草木のささやきを知ることができたのでした。

ひとしく、その蒼茫そうぼうとしたふしぎな空、ふしぎな蒼白い星のかずかず、そういうものは夜になると沼の上を覆おおうてくるのでした。月や星のかげは、水中の祝祭にでも現われたように、矢のよくな青白い光の線状を乱射してくるので、かれらはその光のあいだを泳ぎ廻りながら、ただ、水と空と夜との世界を遊びにふけるのでした。そこでは一切がかれらの仲間ばかりの世界で、何者もその美しい世界を乱してくるものがなかつた。ただ、葦やよしの

根が、さきの方に風をうけると、ふしぎに揺れて、水のなかで低い笛のような音を立てるのと、更ふけるにしたがつて繁ふくなる夜露が、しんとした水面にかすかな音を立てるばかりで、あとはただ虫のこえばかり聞えるだけでした。虫は水の中からも起ってくるように、あちこちで啼ないていたのです。

けれども、古い魚だけは、夜もおちついて底の方へ下りようともせず、動こうともせず、ひとところじつと凝こりあがつて、ぽっかりと浮いているのでした。かれの背なかには、夜風がふれてゆき、星や月のひかりも、空にあるごとに、かれに触れて冷たく濡ぬれてゆくのでした。そのたびに、かれの背中は蒼白く輝き、すこしずつひりひりと、一枚々々の鱗がふるえるようになるのでし

た。それらの月や星のひかりが、この古い魚にとって、どれだけの喜びであつたかもしれない。かれはその光に打たれるごとに、喜ばしそうにからだをすこしずつ動かすのであつた。そうするときにのみ、かれのからだは生きていように見えるのです。そのほかは、いつも、じつと死んだようになって動かないでいるのでした。

夜はちようどこの沼から三里ばかり離れている大きな都会には、盛りあがるような電燈の海が波うっていて、それが非常な巨大な軍艦のように黒ずんで、どっしりと重々しくなつて見えるのです。ちようどその余映のような、ほんのりした明るみが、この沼の水

の上にも、あるかないかほどの明るみを浮ばしてくるのでした。

魚はその螢ほたるのあかりのようなものをまで懐なつかしそうに、からだに吸いとるようになしていたのです。

「おれは晩になると、このほんのりした光さえ慕わしくなるのだ。あの明るい賑にぎやかなところはいつたいてこのあたりにあるのだろう。そうして、それがおれには何故なぜ見ることをゆるされないのであろうか。こうして、からだにまで光をうけて、おれはいつそこへゆけるのだろうか。」

かれはそう考えると、青い目で、そらの方をゆつくりと眺めるのでした。空には大きな都会のさまざまな街まちまち々の姿や賑やかさ、または音楽や燈影が、まるで地図のように広げられてくるのでし

た。白い道路と道路、都会の美しい肌はだ、それらが星と星とを織り込んで眺められてくるのでした。

「あそこには何も彼もある。おれが永い間考えとおしたふしぎな国がある。そこには一切が光でみたされているのだ。この沼のよくな暗みや水垢や塵ごみくた芥があそこには一つもない。」

魚はこう考えると、すこしずつ、からだを動かしながらいました。星の位置が変わるごとに、かれもその静かな位置を変えてゆくのでした。ちようどそれは物もの差さしで計ったように、しぜんに、かれは天上のうごきをからだに受けながら、その意志こころを継いでゆくもののようにでした。

「おれがいつも自分でも知ることのできないうちに、
向むこう岸ぎしの

暗みへまで吹かれるように動いてゆく。ふしぎに自分でそのちらを知る事ができないのだ。そして向岸の暗みへゆきつくと、間もなく、あおじろい夜明けがやってくるらしいのだ。あそこは水も冷たい。別な新しい水が湧わいている。」

魚はこうつぶやいているうちに、ふしぎに北へ北へとかれのからだが流されてゆく。星もみな北へ動いているように、だんだん光を失ってゆくのでありました。

魚は、ときには烈はげしい日光をせなかにうけながら、沼の岸の方にからだをすりよせ、そしてはぼろぼろと落ちる土くれをまで、なつかしそうに食べつくすのである。または木の根などに、から

だが痛むのも関かまわらないで、擦すり寄りながら、くるしそうに悶もだえて
いるのであります。

「おれのまだ見ないところがある。この岸さえ攀よじのぼってゆけ
ば、それがはつきり判わかつてくるのだ。おれは毎日この岸べ辺にきて
空の方をながめている。岸つづきの珍らしい山河や、夜になると
明るくなつてくる都会が、この岸つづきの果はてにあるのだ。おれは
それを考えるとたまらなくなる。」

かれはそう思いながら、じとじとになった岸の土をぱつと呑のみ
こんでは、くるしそうに吐どいていた。泥どろにごりした水が乱れた汚きたた
ない水脈をつくつては流れた。

「この土のあじわいさえも、いまはおれを苦しめるばかりだ。お

れは一日も早く明るい地上に出てゆきたいのだ。ふしぎな地上、まだ見たことのないものが、数限りなくある地上——。」

魚は考え沈みながら、ぼんやりと、こんどは疲れきって浮いていました。それはまるで日光に透いた沼水のなかに、いつの間にか鱗のいろさえ衰えかけていたが、それでも、できるだけの努力と我慢とをつづけて、しつこく、その岸边をはなれようとはしなかつたのでした。他のいろいろな魚族はみんな暗く涼しい底の方に沈んで、やすらかに昼間はねむりふけているのでした。誰一匹として古いこの魚が、水の上にも動かないでいるとは気がつかなくかつたし、そんなことは若いぴちぴちした魚族にとつては何でもないことでした。唯かれらは時々底の方から、水の上には

んやり浮いている大きな古い魚の姿を、まるでそれは描いたような姿でいることを不思議そうにながめていました。なかには、

「あれはやはり魚族のうちだろうかな。ああいう大きなやつが、この沼にいたかな。」

そう鮎のようなものがいうと、とぐろを巻いていた長い魚はこう答えました。

「いや、あれは魚族ではあるまい。いつもあそこにいるから。まだおれは、あいつの動いたのを見たことがない。」

ところがまた一匹の鯉のようなさか怜しげな尾とひれをもった魚が、「あれはこの沼じゅうで一番大きな魚だ。あいつは何年前からか知らないが、あそこにじっとしてふしぎに何かを考えているのだ。」

あれは何も食わないらしい。水ばかりを呑んだり吐いたりしていらしいのだ。あれのそばへ寄ると、なんだか厭いやな匂においがする。」
そう言つて、きみわるそうにその影をしずかに眺めました。

「だが、あいつはいつたい、何を考えているのだろうか。」
鮎あひのようなものが、水垢かを搔かきながら欠伸あくびをしいしい言いました。

「さあな。何を考えているのかな。」と長いやつがこたえると、ものうげに、くるくるとぐるを巻いてやすんでしまいました。

そのとき水の上の影は、日光のあんばいで陽かげろう炎ろうのようにゆらゆらしながら、それがまた沼底の方まで輪廓をえがきながら、大きなうつつりした陰影をおとしているのでした。うすにぎりした

水底のかがが余り大きかったので、かえって小さい魚族はだれ一匹として知るものがなかったのでした。

古い魚は、やはり毎日のように浮きあがっていました。悲しそうに、ときどき、ぽっかりと空気をひとくち吸うとぽつと吐いて、寂しそうに長い吐息をつくのでした。その泡はあわすぐきえてしまいます。と、また、あとは死んだも同様の動かない姿がいつまでもそこにながく止っているのでした。

「おれはこうしているうち、妙に気が遠くなる日がつづいてゆくのはどうしたものであろう。あたまが痺しびれるようになって、つい知らず識しらずうとうととしてしまうのだ。まるで夢を見ているよ

うな気がする……。」

と、かれは、ようようと葦の根にからだをささえながら、非常に弱くなったからだをつくづく眺めるように**つぶや**きました。実際、かれは、いつか見たときとくらべるとからだ中が瘠**や**せてしまつて、それに鱗のつやがほとんどなくなり、どこか、よろよろと尾ひれのちからも自由にならないようなところが見えました。その目はとろんとして何を見つめるといふことなく、弱々しく、たよりなくなつて見えるのでした。

「おれは自分でも次第にからだが重くなるような気がする。ともすると、じつとしていられなくなつて何者かがおれを引いているような気がする。そのため、おれは妙にひよろひよろするのだ。」

そう考えながらもやはり、

「この岸つづきに何かがある。おれにはわからないが何かが行われている。おれたちの世界にないものがそこにあるのだ。」と考えて、また、よろよろしました。

「おれのからだの上に何物かが乗っているような気がする。そのためおれは重くて自由に泳げないのかもしれない。」

魚はこう考えたときに、ひとりでに、くるりと裏がえしになつて、白い腹をあらわしたのです。その晒さらされたような白い腹は、あさましい褪あせた色をしていました。

「だが……こうしておれはもう起きあがるちからさえなくなつたが、しかし何といういい気持がするのだろう。うっとりとした何

とも言いようのない気持だ。ひよつとすると、おれはこのまま起きあがれないで、息が絶えてしまうかも知れない。それにしてもおれは何という安々したいい気持になったことであろう。」

かれがそう考えているうちに、白い腹がすこしも脈をうたなくなりだしたのです。それはあまりに長く生き過ぎた老魚としての、どつしりした姿が水彫りにされたまま、しんとした水の上には今は全きまでに浮きあがったのでした。

けれども、かれは幾年かの間考え通した地の上のものを、何一つとしてさぐることができなかつたのでした。

ただ安らかな死がかれのところにきただけなのでした。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学名作集（下）〔全2冊〕」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年3月16日第1刷発行

2001（平成13）年5月7日第12刷発行

底本の親本：「室生犀星全集 第三卷」新潮社

1966（昭和41）年2月28日発行

初出：「赤い鳥」

1920（大正9）年12月1日発行

入力：門田裕志

校正：きりんの手紙

2019年7月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

寂しき魚

室生犀星

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>